

## 勝山市の ESD の今までと、これから

福井県勝山市長 山岸 正裕

子どもたちをどのように育て、どのような人間にしていけるか。教育の原点はここにあり、ESD はその中心的な存在であると考えている。ESD は人と人、人と自然環境など、つながりのあるものすべてと良好な関係をつくり、現在だけでなく先の世代までの持続性に視点をあてた教育プログラムである。

勝山市は、豊かな自然環境を持続発展させて、ふるさとに誇りと活力を生み出すエコ環境都市を目指してきた。そのような中、2007 年に突如としてアメリカの経済紙フォーブスの電子版に、勝山市がクリーンネスシティトップ 25 都市の世界第 9 位にランクアップされた。世界の名だたる有名都市、カルガリー、ホノルル、ヘルシンキ、オタワ、ミネアポリス、オスロ、ストックホルム、チューリッヒに続き、日本、アジアでは 1 位のランキングであった。

この評価を市内外にさらに高めて、市民の自信につなげたいとの強い思いから、2012 年 5 月に第 20 回環境自治体会議を勝山市で開催した。

全国各自治体の環境保全と、その多様な取り組み事例の紹介の中で注目を集め、高い評価を得たのが勝山市の小学校、中学校の環境保全活動の報告であった。それぞれの小学校、中学校の環境保全活動を演劇や実演、スクリーンなどで工夫を凝らした発表は、参加者の共感と賞賛を呼んだ。事例は各学校によって対象が異なり、赤とんぼの生態調査、ミチノクフクジュソウの保全、ヨシの湿原保全とその活用、バイカモが自生する川の再発見と浄化活動、ホテルの生育環境の保全など、生徒たちが普段、何気なく見過ごしている環境にあらためて視線を注ぎ、保全活動によって持続する価値の新たな発見が教育プロセスの中に生かされていることにも高い評価を得た。

勝山市教育委員会では、市長部局の協力の下、初期には環境保全推進コーディネーターを配置して、教育関係者の情報共有システムを構築し、地域独自の教材開発、教職員の研修と授業をサポートして、子どもが環境教育に身近な形でなじむ教育を推進してきた。その後、阿部先生の日本環境教育学会にも参加し、正規の教科でもなく教材もなかった ESD を総合的な学習の時間に組み込み、カリキュラム化して発展させてきた。その成果は勝山市内の全小中学校がユネスコスクールに加入することにもつながった。

今、環境自治体会議勝山会議から 8 年近く経過する中で、ESD は、勝山市の小中学校に定着し、その活動は地域との交流を深め、生徒たちが地域を深く知って、ふるさとのすばらしさと誇りを発見する喜びにつながっている。さらには無関心な大人への啓発が、地域社会の環境保全活動を高めるきっかけにもなっている。

勝山市は 2009 年に「恐竜溪谷ふくい勝山ジオパーク」として日本ジオパークに加盟し、市民団体がジオパーク活動に取り組んでいる。「大地の公園」であるジオパークは、ふるさ

との環境を包括する地球環境と密接な関係にあることから、小中学校でも、プログラム化されたジオパーク学習をはじめとするジオパークを題材とした ESD を実施しており、多様な視点からのふるさと教育を展開している。

ここ数年にわたって、市内の中学校、高校の生徒たちが市長と話し合う機会をつくってきているが、その中で、喜ばしいことは、ふるさとの良さを語り、さらに良くするための積極的な提案をする生徒が年ごとに増えていることであり、その中身が具体性を持って考えられていることに感心する。

さらに、私は、2020 年で市長在任 20 年になるが、最もうれしいことは勝山市が好きで住み続けたい、一旦市外に出てもいつかは帰って来たいという生徒が増えていることである。最近の中学 2 年生のアンケートでは 90%以上の数値を示している。

環境の持続性が担保されることによって、社会の持続性が担保される。さらには、持続可能性という概念はそれを実現する次世代の存在がなくては成り立たない。勝山市の ESD はそのような次世代を確実に育ててきており、今、世界が目指している SDGs のエンジン機能をすでに発揮していることを誇りに思っている。